

年代	西 暦	和 暦	月 日	出 来 事	
1500年代	1507年	永正4年		臨済の僧「嶽應元海」により、臨済宗の寺院として現在の場所へ (それ以前は、「金井の地」)	
	1533年	天文2年	5月18日	嶽應元海、示寂	
1600年代	1624年	寛永元年		興禅寺(本市下横町)六世、虎谷春喜が 曹洞宗に改め当地に移転(長松寺開山)	
	1633年	寛永10年	12月6日	駿河大納言 徳川忠長 自刃	
	1650年	慶安3年	3月15日	虎谷春喜(一世)(興禅寺六世)、示寂	
	1669年	寛文9年	4月28日	通庵春達(二世)、示寂	
	1682年	天和2年	7月28日	一峰玄隣(三世)、示寂	
	1690年	元禄3年		「長松寺ぐるま」と呼ばれた水車が回り始める。 (堰方奉行より許可された3つの水車の1つ)	
1700年代	1726年	享保11年		火災に罹り堂宇全焼 (本堂、衆寮、山門、鐘楼、薬師堂などを焼失)	
	1726～	享保年間		火災以降に、徳川忠長 自刃の間を、高崎城から移築 (今のところ、正確な年月は不明)	
	1736・42			大水害/下の町没す(1736年) 赤坂番所に船がつく(1742年)	
	1744～	延享年間		本堂再建はじまる	
	1754年	宝暦4年	7月25日	直山門正(四世)、示寂(世寿93歳)	
	1763年	宝暦13年	4～7月	大而宗龍禅師(47歳) 第2回 安居(4月15日～7月15日) 第1回 授戒会(6月18日完戒)(197名) 教授師: 穎明拔錐(五世)	
	1767年	明和4年	3月26日	穎明拔錐(五世)、示寂	
	1778年	安永7年	11月	釋迦如来誕生蔓荼羅極彩色畫像(密山拔宗叟代)	
	1781年	安永10年	3月	大而宗龍禅師(65歳) 第49回 授戒会(3月21日完戒)(405名) 教授師: 密山拔宗(六世)	
	々	天明元年	5月1日	長松寺「石經藏」建立	
	1783年	天明3年		浅間山大噴火	
	1784年	天明4年		噴火被災者への粥炊き出し	
	1789年	寛政元年	12月4日	本堂再建(火災より、およそ63年後)(大工棟梁: 新井林右衛門) 本堂向拝天井絵「天女」(狩野探雲 筆、65歳)	
	1791年	寛政3年		本堂天井絵「龍」(狩野探雲 筆、67歳)	
	1800年代	1805年	文化2年		「涅槃画像」(狩野探雲 筆、81歳)
		1812年	文化9年	5月	狩野探雲、没(88歳)
1827年		文政10年	12月26日	興宗普山(七世)、示寂	
1864年		元治元年	6月29日	卍海吉洲(八世)、示寂	
1871年		明治4年		本堂大改修(大工棟梁: 清水和泉正充賢 ほか)	
1897年		明治30年	4月11日	当地に、群馬県尋常中学校群馬分校 開校(後の高崎高校)	

長松寺の来歴

当寺は、永正4年(1507年)、臨済の僧「嶽應元海」が、金井の地(今の本市末広町の北部)に創立したものであるが、後年衰微したのを、興禅寺(本市下横町)「虎谷春喜」師が、寛永元年(1624年)現在の地に移転し、「曹洞宗」に改めた。故に、同師を以って開山とする。(※文明年間開創説あり)

然るに、享保11年(1726年)火災にかかり堂宇全焼、のちに再建したのが現在の本堂である。(寛政元年、上棟の棟札あり)

庫裏は、高崎城内から移した建物を、少しく取上げたものである。

尚、災前には、本堂の他に、衆寮、山門、鐘楼等も完備し、薬師堂は「和田薬師」として有名であった。

本尊は「釈迦牟尼仏」であるが、他に十一面観世音菩薩、薬師如来、聖観音、地藏菩薩等の像を安置する。(薬師如来は、和田義盛の持仏とされる)

先々住「息耕師」は、社会福祉の志あつく、明治36年「高崎私立樹徳子守学校」を興し、恵まれぬ子女のために教育の途をひらき、数々の表彰を受けた。

駿河大納言

徳川忠長  
自刃の間



(長松寺書院)

徳川忠長(二代将軍 徳川秀忠とお江の次男・三代将軍 家光の実弟)が自刃したと伝えられている部屋。

江戸時代中期(1730年頃)、高崎城本丸の改築に伴い、不要となった城内建物の一部を、当地に移築したらしい。

忠長は、家光との政争の末、非業の死を遂げたとも言われています。寛永10年(1633年)12月6日没。まだ28歳の若さでした。墓所は、高崎市通町の大信寺様にごぞいます。

高崎高校発祥の地 記念の碑

《 記念碑 裏書 》

群馬県立高崎高等学校は明治三十年四月十一日 当長松寺に於て群馬県尋常中学校群馬分校として誕生す 茲に創立八十周年を迎えその由緒を記す

昭和五十三年六月一日

群馬県立高崎高等学校長 中野敏宗  
長松十一世



## 長松寺の天井絵と狩野探雲

焼失後の長松寺本堂再建は寛政元年(1789年)と伝えられる。2点の天井絵は、その当時制作上掲されたものであり、作者はいずれも狩野探雲(上野探雲も号す)である。

探雲は甘楽郡野上村出身。狩野派の主流である探林(『上野人物誌』の探信門人は誤り)の門人として修学、幕府画所に15人扶持をうけ江戸城西の丸普請のさいその絵作に従う。のち七日市藩に御用絵師として勤仕、文化9年(1812年)5月88才で没した。

絵師としての位階は最上の法眼である。制作の年令は天井絵は65才、龍絵が67才の円熟期である。

### 向拝天井絵(天女)



天井板に岩絵具、胡粉、金泥による彩色。剥離多し。  
間口442×252<sup>センチ</sup> 制作年代:寛政元年(1789年)  
奥書:探雲行年六十五歳(筆か)印 印

涅槃絵は極彩色の超大作、晩年(81才)の作であるが、修正加筆が認められる。明治36年田町青木勘之助発願により再表装された。

以上3点とも狩野派正統の作品として貴重なものである。特に幕府絵師の地方での活躍、信仰と奉絵、探雲研究など歴史資料としても重要である。

### 涅槃像大曼荼羅

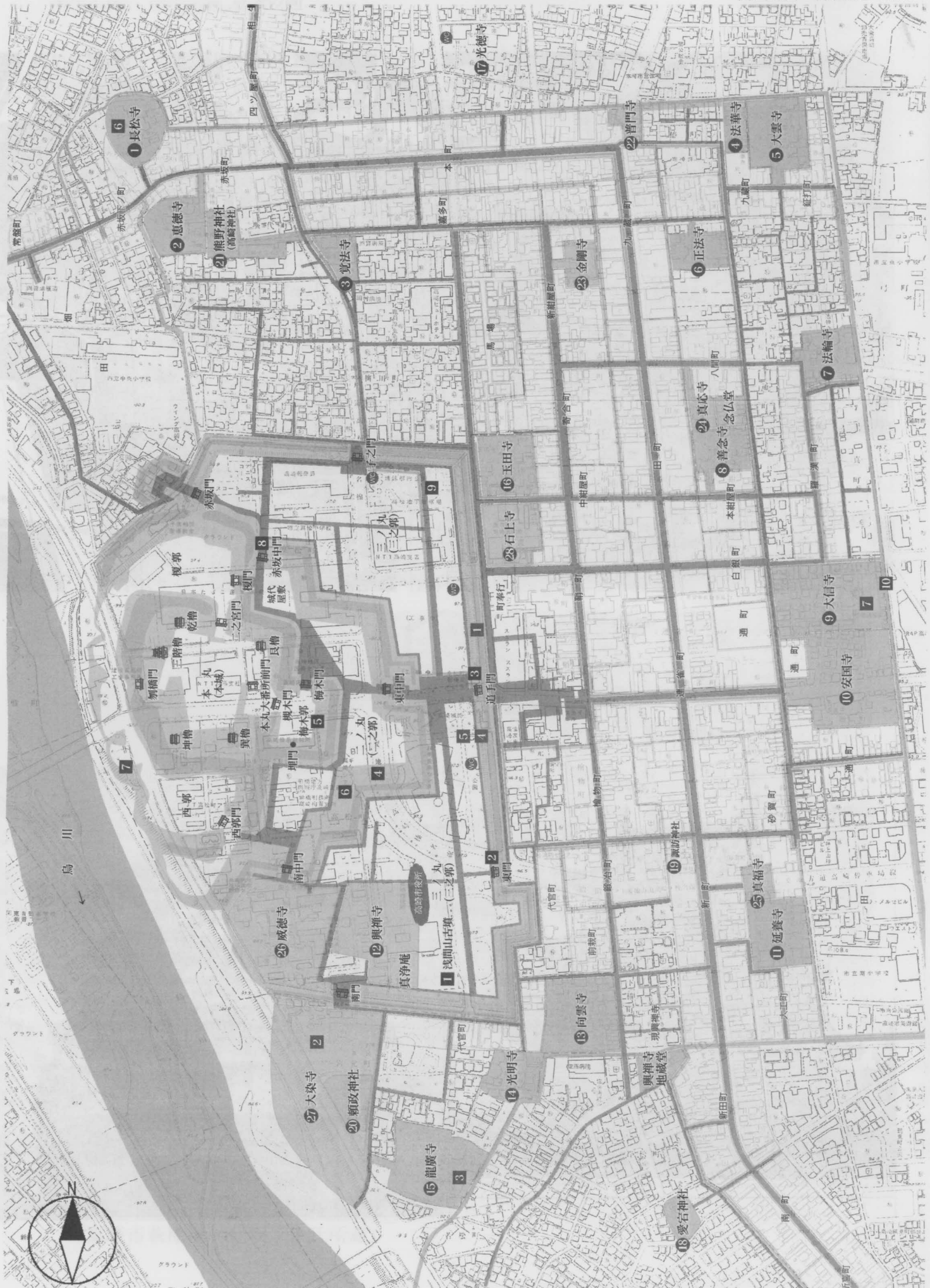


絹本に日本画絵具で彩色。  
縦218×横195<sup>センチ</sup>。掛軸表装 制作年代:文化2年(1805年)  
奥書:法眼探雲行年八十一歳筆 白印 赤印

### 大間天井絵(龍)



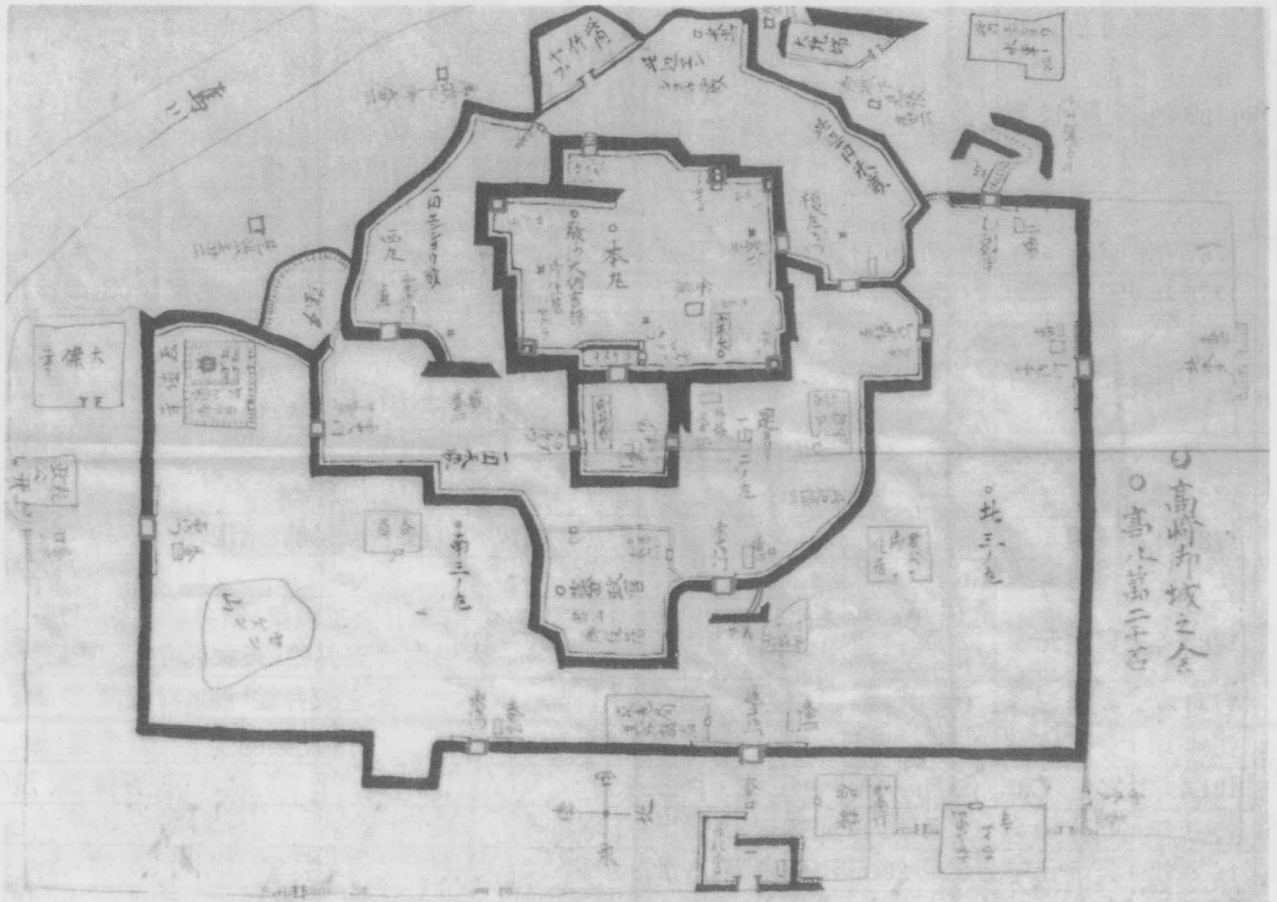
天井板に墨絵  
間口538×445<sup>センチ</sup> 制作年代:寛政3年(1791年)  
奥書:狩野探林門六十七歳探雲守照筆 印



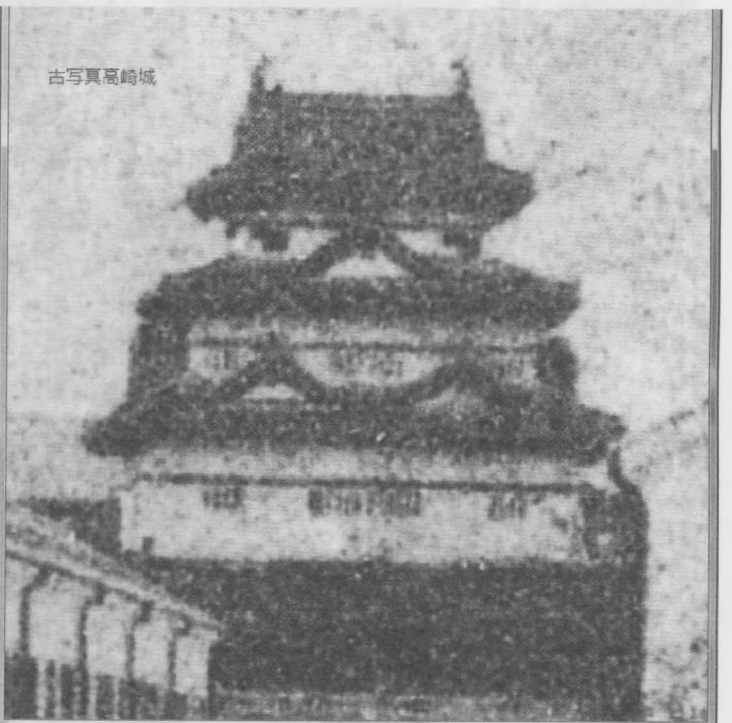
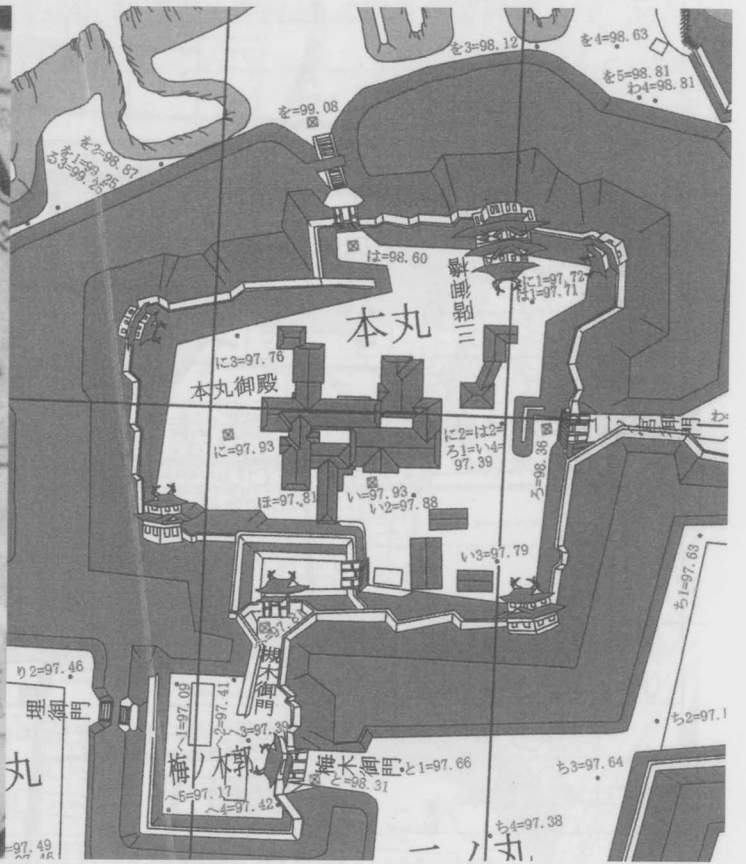
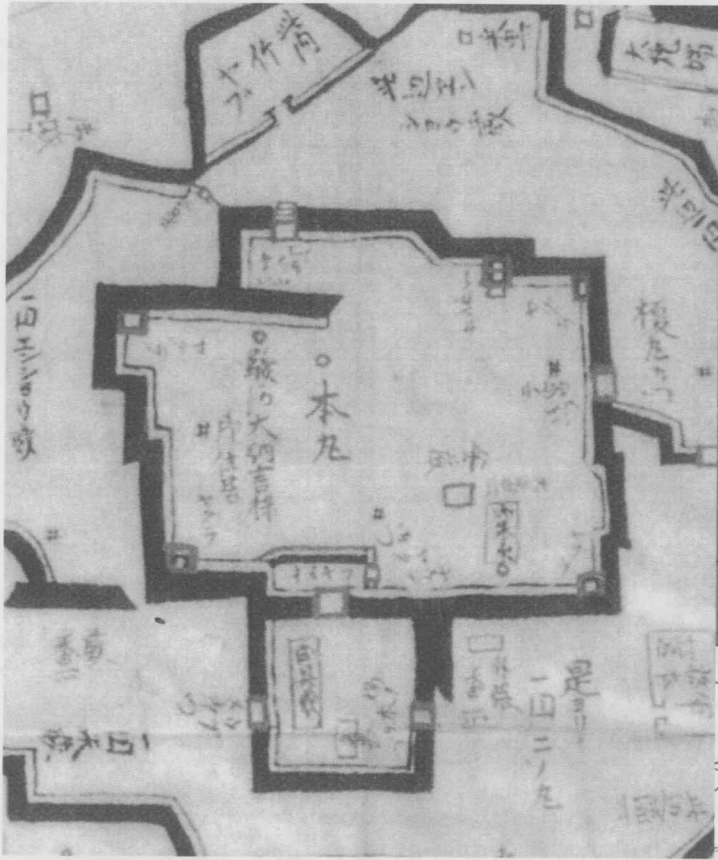
[参考資料] 『櫻井一雄家文書』ほか／文化7年(1810)6月御城内外惣絵図／高崎御城内外略図

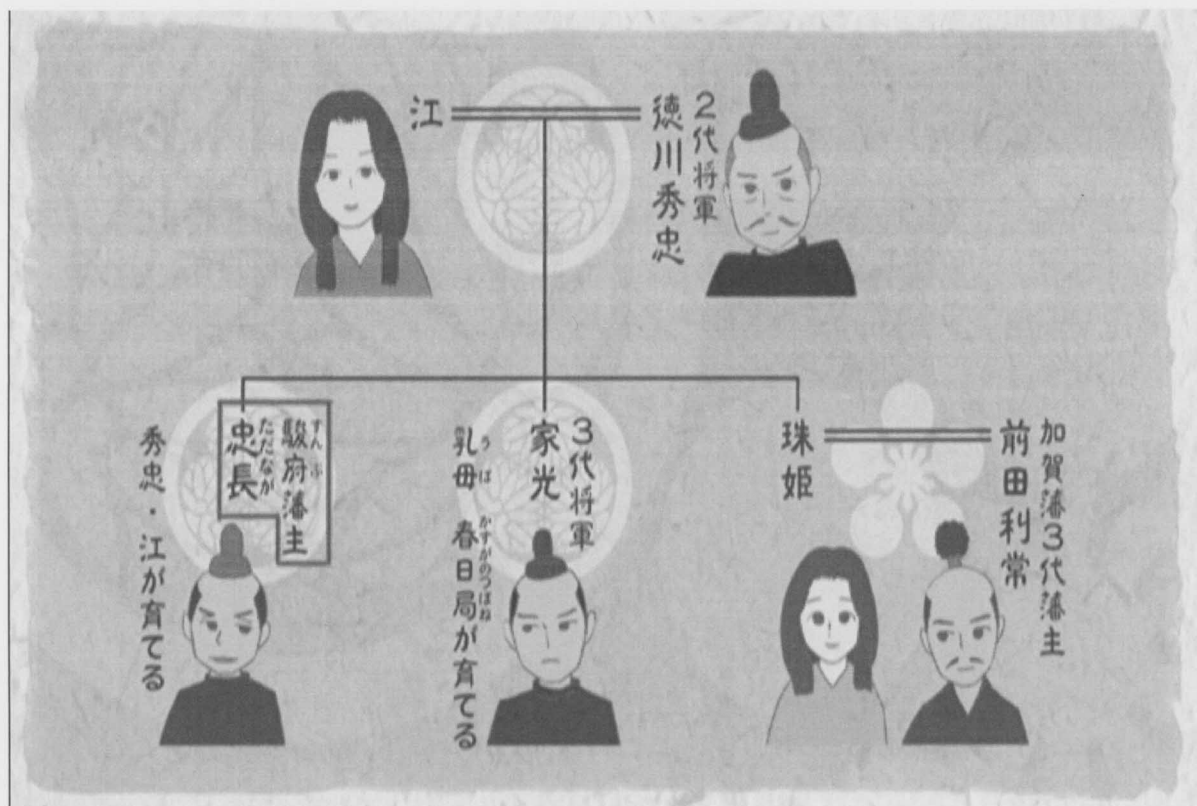
駿河大納言 徳川忠長 自刃の間

徳川忠長（二代将軍 徳川秀忠とお江の次男・三代将軍 家光の実弟）が自刃したと伝えられている部屋。高崎城の改築に伴い、不要となった城内建物の一部を当地に移築した。移築時期は、長松寺の火災後から本堂再建より前の、いずれかの頃だと思われるが、詳細は調査中。



年次不詳 高崎御城之図  
(高崎市萩原町 登坂ツネ氏所蔵)





## 高崎から托鉢、加賀藩に嘆願 参勤交代本陣の寺再建で

北國新聞社 9月3日(水)3時27分配信



江戸末期の1855(安政2)年に発生した安政の大地震で被災した寺院が伽(が)藍(らん)再建のため、加賀藩領での托鉢(たくはつ)を前田家に嘆願する書状が2日までに、群馬県高崎市の曹洞宗長松寺(そうとうしゅうちょうしょうじ)で見つかった。寺は前田家の参勤交代のルート上にあり、書状の内容から、寺が藩の本陣(休憩所)であったことも裏付けられた。参勤交代を縁に結ばれた、石川と高崎の交流を浮かび上がらせる史料となる。

史料は、長松寺が大地震の2年後、加賀藩で曹洞宗の筆頭(ふでがしら)を務めた天徳院に宛てた書状の下書き。地震と大雨で損壊した寺を再建するため、天徳院を介して、前田家に加越能三国と加賀藩家中への托鉢の許可を願う内容となる。

書状は、北國総合研究所のふるさと講座「百万石の大名行列」(金沢ケーブルテレビネット放送)の番組収録で、研究員の東四柳(ひがしよつやなぎ)史(ふみ)明(あき)金沢学院大特任教授と横山方子(まさこ)石川郷土史学会幹事が読み解いた。

参勤交代で訪れた13代藩主前田斉泰(なりやす)らを30年にわたりもてなしたことや、地震や大雨で藩主らが休息した部屋が傾いたことなどが切々とつづられている。横山幹事は「寺院が本陣であることに加え、藩主のお墨付きがあれば托鉢の成果は大きい。加賀藩に大きな期待を寄せていたのだろう」と推測した。

東四柳特任教授によると、長松寺が托鉢を希望していた1858(安政5)年には、加賀、越中を中心に加賀藩内でも大地震が発生している。実際に托鉢が行われたかどうかは定かではないが、「参勤交代のつながりが、遠く離れた寺院の再建につながった可能性がある」とした。